

## ビザンツ「都市・市民」研究の動向と課題

——「封建制」論と関連させて——

井 上 浩 一

〔序〕

前近代、近代を問わず人間社会の歴史において「都市」は重要な役割を果たしてきた。それゆえ歴史学において都市の問題は主要な研究テーマの一つである。最近の西洋史学界の動向をみても、たとえば増田四郎氏の論文、「中世社会史における『特殊ヨーロッパ的』なるもの」<sup>①</sup>は、一章を都市・市民にさき、それがヨーロッパ社会の発展にとって極めて重要な要因であったことを再確認している。このような総括の背後に我々は長年にわたるヨーロッパ中世都市研究の部厚い蓄積を感じる。また中世イタリア都市に関してもすぐれた研究がみられ、<sup>②</sup>日本中世史においても、従来の領主制・荘園制研究中心から都市へも関心が向けられる傾向が感

じとれる。<sup>③</sup>歴史理論研究の面においても、都市と農村の関係<sup>④</sup>分野論という形で都市が注目されているようである。

他方ビザンツ史研究において事情はどうであろうか。戦後のビザンツ史学界は「ビザンツ封建制」の問題を最大の課題としてきた。ユーゴのオストロゴルスキー G. Ostrogorsky らによって「封建制」研究は進められ、とりわけ五〇年代後半から六〇年代初頭には「ビザンツ封建制」論争が国際的に展開された。<sup>⑤</sup>しかしその後「封建制」研究は長い沈滞期に入った。海外の研究動向を反映して、我国でも、「ビザンツ封建制」に関する研究は六〇年代半ばまで渡辺金一氏、米田治泰氏によって進められたが、六八年頃からはほとんど行なわれなくなった。しかし「封建制」論はビザンツ社会の歴史を、人類社会の発展の一部としての普遍性と、

ビザンツ社会自身の歴史的特殊性との接点において把えようとする視角を内在させており、ビザンツ社会の発展、特質を明らかにするためには、それが提起した問題に今一度取り組むことが必要であると筆者は考える。一九六〇年前後に展開された「封建制」論争の夭折の原因を考え、その克服の道を探究することは現在筆者の主要な問題関心である。

ゆきづまっている「封建制」論の新たな展開のためには、一方で新史料の発見・公刊、実証研究の発展が不可欠であるが、他方では従来の研究の方法的欠陥を明らかにし、新たな視角から問題を再検討することが必要であろう。特に冒頭に述べたような意義をもち、歴史学の各分野において研究が進められている「都市・市民」の問題について考えてみよう。東地中海世界はギリシア・ポリスの時代から都市的な世界であり、ビザンツ帝国の時代に入っても西欧とは対照的に都市の全面的な衰退はなかった。かつて封建制確立期、一一―二世紀には多くの都市の成立、発展がみられる程である。それゆえビザンツ社会における「都市・市民」の歴史的役割の視角が、「ビザンツ封建制」の成立、発展、その特殊性の解明に不可欠と思われる。ところがオストロゴルスキーを中心とする従来の「封建制」論はこの問題を視野にとらえていなかった。都市研究はビザンツ史研究においてもっとも遅

れた分野の一つであり、その遅れは「まさに悲劇的」<sup>⑤</sup>と表現される程である。だが「ビザンツ封建制」論の新たな構築のためにも、他の歴史的世界の中世都市研究に学びつつ、ビザンツ都市研究の「悲劇」を克服してゆかねばならない。本稿はそのための準備作業として、戦後の「都市・市民」研究を、筆者の問題関心に沿って、封建制の確立期―一世紀に焦点をあわせて整理したものである。ところで遅れている都市研究の中でも、一世紀を対象とした研究は特に少なく、「封建制」論争の刺激を受けた六〇年代前半に一時活発になっただけで、六六年の第一三回国際ビザンツ学会を最後として、「封建制」論争の消滅とともに今日に至るまでその研究はほとんど行なわれていない。そこで本稿は第一章において戦後から六〇年に至るまでの都市研究と「封建制」論の関係をとらえ、つづく第二章では六一年の第一二回国際ビザンツ学会から六六年の第一三回の学会に至る間の、一世紀都市研究の成果について、市民階級の果たした役割、とりわけその政治的活動、市民闘争の歴史的意義のとらえ方を中心に考察したい。最後に第三章では六〇年代後半からの研究動向の変化をみた後、本稿のまとめとして、六〇年代前半に達成された成果をどのように受け継ぎ、批判・発展させてゆくべきかを考えてみたい。

⑤ 増田四郎、『西洋中世社会史研究』、岩波書店、一九七四年、三三三

一三八八頁。

- ② 清水広一郎、『イタリア中世都市国家研究』、岩波書店、一九七五年。
- ③ 『日本史研究』、一三九・一四〇号（一九七三年度日本史研究会大会特集号）。
- ④ 望月清司、『マルクス歴史理論の研究』、岩波書店、一九七三年、とくに第七章。
- ⑤ 渡辺金一『ビザンツ封建制の諸問題——論争の展望』、『ビザンツ社会経済史研究』、岩波書店、一九六八年、三一五〇頁。米田治泰『ビザンツ封建制研究の動向』、『西洋史学』、六六号（一九六五年）、四四一—五五頁。
- ⑥ 米田治泰『ビザンツ都市の社会構造——イスラム都市からのアナロジー——』、『大阪市立大学人文研究』、二二—四（一九七一年）、四六頁。

## 〔第一章〕

序において述べたように、戦後のビザンツ史学界は「ビザンツ封建制」の問題を最大の課題としていた。「封建制」論の礎石をおいたのはオストロゴルスキーで、ビザンツ史の時期区分を扱った一九四一年の論文は、戦後の「ビザンツ封建制」研究の出発点となった。この論文において彼は一一世紀以降を封建制の時代とし、その時代の特徴を、大土地所有の成長と自由農民の隷属化、かかる大所領の不輸不入特権の獲得、西欧のレーエン制にあたるプロノイア制の成立に認めた。一一世紀以降、ビザンツ特有の集

権的国家体制は解体してゆき、基本的には西欧の封建社会と同じ性格の社会、「ビザンツ封建制」が成立したと彼は説く。西欧の封建社会にみられる諸要素がビザンツ世界にも存在したことを確かめようとする彼の方法論は、西欧封建社会における異質の存在と考えられていた「都市・市民」を一応視野の外においていた。大戦後の「封建制」論が、ビザンツ社会の発展の上で、「都市・市民」がどのような役割を果たしたのかという問題を対象の外においていた中で、唯一都市をとりあげたのはフランスのブレイエ、J. Brechet<sup>②</sup>であった。しかし彼の見解はむしろ都市研究の遅れを正当化することにもなる。彼は四九年に『ビザンツ帝国の諸制度』を發表し、その中で末期における都市を次のように整理している。テマ制度の成立以降の時代（中期、七一〇世紀）には古代以来の都市の自治は消滅過程をたどった。ところが末期に入ると都市は自治権を中心とする諸特権を皇帝から得て自立する傾向を見せた。この現象は表面的には西欧の中世都市にみられる運動と似ている。しかしビザンツ都市の場合、自立の主体となったものは商工業市民の団体ではなく、土地貴族であり、後者は都市をも支配下においたのである。末期における都市の自治獲得の動きは、中央集権的国家体制から土地貴族が自立し、都市を拠点として独立国家を形成する動きに他ならない。首都のコンスタンティノープルでも

事情は同様で、初期にみられた民衆の政治的党派、デーモイは、中期には形骸化し、自治機関としての機能は完全に失なわれる。

以上のようなブレイエの主張はオストロゴルスキーらの「封建制」論の方法的特徴とも相まって、ビザンツ社会の究明にとって何よりも土地貴族―封建貴族とその支配下の隸属農民の分析こそが第一の課題であるとする考え方を支えた。オストロゴルスキー自身、プラクティカ（所領の土地台帳）の分析、プロノイアの包括的研究、さらに封建所領のイムニテートの研究に力を注ぎ、末期ビザンツ社会に「封建制」の存在を確認しようとした。<sup>③</sup>ソ連の研究者たちもほぼ同じ視角から農民の土地所有・保有の形態、隸属の形態、あるいはイムニテートの問題の解明にとり組み、封建制の成立期を確定しようとしていた。<sup>④</sup>農村・農民の問題が研究の中心であったのは西欧・アメリカでも同様で、この時期に発表されたビザンツ社会経済構造論の代表的なものとしてカラニス P. Charanis の論文<sup>⑤</sup>を挙げることができるが、彼もまた一〇八一年のコムネノス朝成立以降は大領主が決定的な力をもつ社会であったとし、土地所有の形態、農民の存在形態の分析に主眼をおいている。「都市・市民」に関しては一一世紀からその活動がみられると指摘しているものの、わずかなスペースしかさかれておらず、すべては今後の研究課題として残されていた。

以上のように一九五〇年代の前半まではビザンツ社会の分析はまず農村・農民を対象とし、都市・市民にはほとんど考慮は払われなかった。社会構造の特徴、その発展の解明にとり組もうとした研究者の多くは、オストロゴルスキー的方法論とブレイエの定式から、都市研究よりも領主、農民の問題を第一の課題としていた。「ビザンツ封建制」論は、ビザンツ社会の停滞性、ローマ帝国の伝統の存続を説く伝統的なビザンツ史観に対して、その社会の発展を説く積極的な意味をもちつつも、この段階では農村の社会構造の分析から西欧の封建社会との類似性を確認しようとすることにとどまっており、都市・市民も含めて真の意味での「ビザンツ、封建制」論ではなかった。

これらの一連の研究とは別に、ロペス R. S. Lopez やランシマン S. Runciman<sup>⑥</sup>の実証的な都市経済分析がこの時期になされたことも指摘しておきたい。彼らは商工業者の形成した団体「ギルド」の分析で小さな誤りをおかしており、それも一因となってこのギルドの、商工業市民のもつ意義を充分に理解できなかった（その誤りは六〇年代初の都市研究の高揚の中で修正される――後述）。が、ともかく彼らの研究は今日に至るまで価値を失なっていない。

ビザンツ社会の究明の一環として都市・市民研究が重要視され

始めたのは五〇年代半ば頃である。この問題にまずとり組んだのはソ連の研究者たちであった。ソ連では五〇年代半頃から「ビザンツ封建制」の特殊性が問題とされ始め、それを明らかにするための一つの視角として都市の問題がとりあげられるようになったのである。その影響下にルーマニアのフランチェス E. Francés が五五年に末期の都市と封建制を扱った論文を発表し、都市・市民をビザンツ史の中にくみ込もうとした。

フランチェスの論文は大きく分けて二つの論点を含んでいる。

第一に、彼はラテン人による征服後のビザンツ都市の動向を記述史料に基づきつつ分析し、一三世紀において都市を支配していたのは封建領主層であったことを確認する。彼によれば、都市はラテン人征服者やニカイアのビザンツ皇帝から自治の特権を獲得しているが、その主体は封建領主層であり、都市の自治の発展は反封建制という形をとらず、地方の領主層の主導するものであった。

この第一点においては彼は基本的にブレイエの考え方を受け継ぎ、一層詳しく実証的にあとづけたといえよう。しかしながらフランチェスの第二の論点は、ブレイエにはみられず、またチャラニスが軽くふれるにとどまったところの、ビザンツ社会を動かす要因として都市・市民を積極的に評価することである。フランチェスは二三世紀末―一四世紀に都市に与えられた特権文書を順次検討

し、そこに都市の支配者「封建領主と対抗しつつ、しだいに特権獲得の主体として明確に姿を現わしてくる都市市民の成長を読みとる。このような傾向は交換経済の発展した都市において一層顕著であり、風州第一の都市テサロニカで一四世紀半頃に起った民衆蜂起、Notolan 運動を市民の反封建闘争の頂点と考えて、次のような結論に達した。一四世紀に至って都市市民は封建領主やイタリア商人に対抗しつつ、帝国の政策を修正させる程の力をもった。ソ連の研究者の中でも特にシュジュモフ M. S. Cошоров は都市の重要性を高く評価し、五七年には、一二世紀末のコンスタンティノープル商工業市民の反ラテン闘争が敗北の中にも一定の成果を得たことを指摘する論文を発表した。

都市・市民研究への関心はようやく高まり、五八年にミュンヘンで開かれた第一回国際ビザンツ学会では、西独のキルステン E. Kristen が「ビザンツ都市」と題した報告を行ない、合わせて副報告、討論が行なわれた。キルステンの報告は初期から末期までのビザンツ都市を概観し、その問題点を網羅的に列挙したもので、都市研究の礎石ともなった。地理学者である彼の報告は独特な分析視角に基いており、我々には難解な点も少なくない。その内容全般については渡辺氏によって詳しく紹介されており、ここでは本稿の文脈に沿ってキルステンの次のような指摘にのみ注

目しておきたい。彼は末期の都市の内部構造に関する上述のフランチェスの主張に対して批判を加える。ビザンツ都市は封建領主の支配下におかれ、都市の自立化も彼らに主導されたものであったが、一四世紀には交換経済の発展を背景に都市市民層が抬頭し、封建領主の都市支配を動揺させるといふフランチェス説に対して、キルステンは都市の自立の主体は全体としての都市住民であると考ええる。つまり彼は末期においても都市内部にデモクラティアの原理が存在したと考えている。キルステンは主張する。なるほど都市住民の間には *nobiles habitatores = deipour or kazaf* と呼ばれる貴族的存在があった、だがフランチェスのように彼らを都市の支配者＝封建貴族と考えることは正しくない。かつ彼らは未だ特権的都市貴族層を形づくってはならず、市民の中の有力者にすぎない。皇帝によって任命された役人、あるいはその地位を篡奪した地方領主が、都市外部の勢力として、貴族的存在をも含む都市住民全体に対して支配権を行使していたのである。都市の支配者はこのような都市外部の勢力であり、十字軍の到来に際して都市が友好的な態度を示したのも、従来の支配者に代わる新しい支配者と有利な協定を結べると考えたからである。つまりフランチェスが一三世紀にラテン人征服者と協定を結び、都市の自立をめざしたのは、都市をも支配下においた地方的封建貴族である

こと、一四世紀に入ると都市が皇帝から諸特権を得る際に、新たに商工業市民層がその主体として現われてくると考えるのに対して、キルステンはいずれの場合にも貴族的存在を含む都市住民全体が特権獲得の主体であって、地方領主は皇帝の役人やラテン人征服者と同じく外部から都市住民に対峙する存在であると考えている。さらにキルステンが、特権文書には商人も手工業者も彼らの自治の機関も現れないことから、ビザンツ人自身の商業活動の少なさを説き、ここにいう都市は決して西欧的な意味での都市ではないこと、その特権獲得も決して都市の社会的発展や経済的重要性増大の結果ではなく、主として帝国の軍事的理由から生じたものであると主張していることにも注目しなければならない。

都市内部の階層分化の未熟性の指摘、封建領主の支配の中心地としての都市というテーゼの否定と要約できるキルステンの見解は、都市研究の側から「ビザンツ封建制」の存在を否定するものであり、当時始まりつつあった「ビザンツ封建制」論争と密接に結びつくべきものであった。五八―九九年にルメルル P. Lemerle<sup>⑩</sup>、五九年にスヴォロノス N. Svoronos<sup>⑪</sup> がそれぞれ農村の社会構造を扱った論文、新史料を発表し、オストロゴルスキーらの「ビザンツ封建制」論へ鋭い批判を加えた。ルメルルらは帝国の封建化を認めず、末期にも領主＝農民関係の全面的成立はなく、なお中

期にみられた均質な自由農民が存続したと主張していた。ルメルらの研究とキルステンの見解とは農村と都市と対象を異にしているものの、その学説の基本的性格において「反封建制」論という共通性をもっていた。しかしながら、都市と農村を含めた社会構造をトータルに描きたすには程遠い研究水準であった。とりわけようやく端緒にいたればかりの都市研究には「封建制」の成立と都市の関係を問うという視角はなく、「封建制」論争の焦点であった「封建制」確立期——一世紀を対象とする研究は皆無であった。

五〇年代後半の都市研究への関心の高まりは初期ビザンツ都市にも向けられている。西独の指導的ビザンチニスト、デルガー E. Dölger が初期の都市に関する論文を発表したのに続いて「封建制」論の主導者オストロゴルスキー自身も、初期の都市について考察し、ビザンツ世界の発展にとって都市のもつ重要性を指摘した。これまで都市の問題に充分考慮を払ってこなかった彼も、都市の問題をその「封建制」論にくみ込む必要性を感じつつあったと思われる。

なお直接ビザンツ都市を扱ったものではないが、都市研究の発展を刺激したものとして、西欧・ビザンツ・イヌマム三世界の中華都市の比較を行なった、ロムニール M. Lombard やカーモン

C. Cahen の論文<sup>⑤</sup>の五〇年代後半の重要な業績である。

- ① G. Ostrogorsky, 'Die Perioden der byzantinischen Geschichte', *Historische Zeitschrift*, 163 (1941), S. 229-254.
- ② L. Bréhier, 'Les institutions de l'Empire byzantin', *Le monde byzantin* II, Paris, 1947 (1970), pp. 159-176.
- ③ ホムロロムニールの業績について『Byzantion』, 31 (1961), pp. VII-XV. 二一九六〇年刊の著者録目録あり。その他選定前掲論文・米田「動向」参照のこと。
- ④ ソ連の学界の研究動向を知るためにはブルの文献を参照すること。I. Sorlin, 'Les recherches soviétiques sur l'histoire byzantine: I. de 1945 à 1962', *Traux et Memoirs* 2, pp. 489-564, index. Idem, 'II. 1963-1968', *T. M.*, 4 (1970), pp. 487-520. A. P. Kazdan et Z. V. Udaltova, 'Nouveaux travaux de savants soviétiques sur l'histoire économique et sociale de Byzance (1958-60)', *B.* 31 (1961), pp. 187-207. A. P. Kazdan, 'La byzantinologie soviétique en 1964', *B.* 38 (1968), pp. 298-308. Idem, 'en 1966-67', *B.* 39 (1969), pp. 508-532. Idem, 'en 1968-1969', *B.* 41 (1971), pp. 520-541. K. P. Matschke, 'Die Entwicklung der Konzeption eines byzantinischen Feudalismus durch die sowjetische marxistische Byzantinistik 1930-1966', *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 15 (1969), S. 1065-1085.
- ⑤ P. Charanis, 'On the Social Structure and Economic Organization of the Byzantine Empire in the Thirteenth Century and Later', *Byzantinostudia*, 12 (1951), pp. 94-153.
- ⑥ R. S. Lopez, 'Silk industry in the Byzantine Empire', *Speculum*, 20 (1945), pp. 1-42. S. Runciman, 'Byzantine Trade and

- Industry', *Cambridge Economic History of Europe* II, pp. 86-118.
- ④ E. Francès, 'La féodalité et les villes byzantines au XIII<sup>e</sup> et au XIV<sup>e</sup> siècles', *BS*, 16 (1955), pp. 76-96.
- ⑤ M. Я. Сузюмов, 'Внутренняя политика Андроника Комнина и разгром пригорода Константинополя в 1187 году', *Византистическое Временник*, 12 (1957), стр. 58-74.
- ⑥ E. Kirsten, 'Die byzantinische Stadt', *Beiträge zum XI. Internationalen Byzantinisten-Kongress*, V, 3, München 1959, 48 S. mit Anm. 32 S.
- ⑦ 藤辺金一「ユキニツ郡世の諸問題」前掲書一〇一—一三五頁。# たのまのキキスとキルスマンの論点を整理した「後期ビザンツ帝国の概世たのま」前掲書一三六—一六三頁を参照。
- ⑧ P. Lemerle, 'Esquisse pour une histoire agraire de Byzance: les sources et les problèmes', *Revue Historique*, 219 (1958), pp. 32-74, 254-284, 220 (1959) pp. 43-94.
- ⑨ N. Svoronos, 'Recherches sur le cadastre byzantin et la fiscalité aux XI<sup>e</sup> et XII<sup>e</sup> siècles: le cadastre de Thèbes', *Buletin de Correspondance Hellénique*, 83 (1959), pp. 1-145.
- ⑩ F. Dölger, 'Die frühbyzantinische [und byzantinisch beeinflusste Stadt', *Atti del 3<sup>o</sup> Congresso Internazionale di Studi sull' Alto Medio Evo.* (Benevento 14-18 ott. 1959) Spoleto 1959, S. 65-100, =Idem. *ΠΑΡΑΣΤΟΡΑ*, Ethal, 1961, S. 107-139.
- ⑪ G. Ostrogorsky, 'Byzantine Cities in the Early Middle Ages', *Dumbarton Oaks Papers*, 13 (1959), pp. 47-66.
- ⑫ M. Lombard, 'L'évolution urbaine pendant le haut moyen âge', *Annales E.-S.-C.*, 12 (1957), pp. 7-28. C. Cahen, 'Zur Ges-

chichte der städtischen Gesellschaft im islamischen Orient des Mittelalters', *Saeculum*, 9 (1958), S. 58-76.

【第二章】

一九五〇年代末からの「ビザンツ封建制」論争を背景に、六一年にはブルガリアで第二回国際ビザンツ学会が開催された。大会の主報告となった、ソ連の四名の研究者の共同報告「ビザンツ帝国の都市と農村——四—二世紀——」<sup>①</sup>は、五〇年代後半からビザンツ社会発展の解明の一環として、都市と農村の相互関係を重視する立場をとっていた彼らの研究成果をまとめたものである。「封建制」論争の焦点となっていた一—二世紀に関しては、ソ連の代表的ビザンツ史家カシマヤン A. П. Каздан が報告者となった。彼もブレイネラと同じく、一—二世紀にみられる都市の発展、自治の強化を属州の封建貴族の確立ととらえ、属州の都市は帝国の分解をすすめる封建貴族の拠点となつてゆくことを指摘する。しかし同時にカシマヤンはその過程が商工業市民との不調の闘争を通じて実現されていったことに注目している。<sup>②</sup>商工業市民は都市を西欧的な商工業者の自由な共和国にしようとしたが、封建領主の支配下におかれることになった。結論としてカシマヤンは、この都市内部における階級闘争の帰結、商工業市民層の敗北がビザンツの経済的崩壊の基本的な要因であつ

たと述べる。共同報告では封建領主の都市支配に対する商工業市民の闘争が一一二世紀におこなわれ、帝国の発展のコースを規定する重要な意味をもったと述べられた。しかしこの闘争がその時代の基本的な階級対立である領主と農民関係とどう関連しているのかは充分明らかにされなかった。つまり「封建制」論に具体的にどう組み込まれるべきかという展望が示されなかったといえる。この点は次に述べるルメルルの批判を招く一因ともなる。

共同報告に対してルメルル<sup>③</sup>は、報告が「都市と農村」というテーマでありながら、両者の関連が問題とされていないことを不満とし、かつ個別的にみても、都市に関しては前回のキルステン報告を越えるものではなく、農村に関しては彼ら反「封建制」論者の拠り所の一つである新史料「テーベの土地台帳」が用いられていないと批判した。さらにルメルルは都市と農村の関係を歴史社会学的方法に基いて考察すべきだと提唱している。歴史社会学的方法の有効性の問題はさておき、ルメルルの批判は都市研究の遅れの指摘といえる。共同報告をめぐってはさらに、アメリカのカラニス、ブルガリアのアンゲロフ D. Angelov<sup>④</sup>によってもコメントが加えられ、活発な討論が行なわれた。しかし結局討論はすれ違いに終わり、「封建制」論争もまもなく消滅してしまう。他方ルメルルの批判などによってもその遅れが明確となった都市

研究、とりわけ「封建制」論争の焦点であった一一二世紀の都市の研究は六〇年代前半には非常に活発となる。

六二年にブルガリアのティフチェフ P. Tivchev<sup>⑤</sup>が「一一二世紀のビザンツ都市について」を発表し、主として記述史料に基づきつつ、この時代の都市を種々の側面から考察した。都市の社会構造については彼も基本的にはカシュエダンらと同じく、ビザンツ都市の特徴として封建貴族の支配を指摘する。同時にティフチェフは次の点にも注意を向けている。この時代の都市商工業市民はみずからの団体を結成し、それを通して権利と利益を守るために封建国家、封建貴族に対して闘ったこと。しかし封建制の確立という当時の状況下では彼らの闘争はしばしばコンスタンティノールの政府に対する大封建領主の闘いの中に混っていたこと。市民の闘争を単に反封建的とみることはできない、政治的な主体としてなお未成熟な彼らは、当時の支配階級と封建貴族間の権力闘争を媒介として、その階級闘争を行ないえたというのがティフチェフの考え方と思われる。

「封建制」論との関連からビザンツ社会の発展において、都市・市民がどのような役割を果したのかを明らかにすること、とりわけ一一二世紀における商工業市民と封建領主層との関係、

帝国の政治に対する市民層の関与に研究者たちは関心を向けた。以下この時期の若干の研究を紹介しようと思うが、その際に次の点に注意したい。一一―二世紀を扱うならば、史料的にも対象はコンスタンティノーブルに限られてくる。コンスタンティノーブルはある意味では帝国の特殊な都市である。ビザンツ都市研究は平均的な地方都市を対象とするには史料の制約が大きく、首都であり、例外的ともいえる大都市コンスタンティノーブルを対象として都市研究が成立している段階にあった。個々の研究者がこのようなコンスタンティノーブルの特殊性をどう考慮に入れているかを学ぶことが大切であろう。

帝国の他の都市には商工業市民の組織＝ギルドの存在はほとんど確認されていないが、コンスタンティノーブルについては以前からその存在が知られていた。ちょうどこの六〇年代初にはメントル B. Mendl の論文の発表やシジュモフによるギルド史料の刊行<sup>⑦</sup>によって、ギルドへの関心は高まり、ギルドと市民の政治的活動という視角がフランチェスやヴリュオニス S. Vyounis によって採られた。かつて都市研究の先駆をなしたフランチェスはコンスタンティノーブルのギルドに関心を寄せ、次々と論文<sup>⑧</sup>を発表した。彼の考えを要約すると次のようになる。一一世紀にはギルドに組織された市民の政治的活動がみられる。しかしその活動

は当時支配権力を握っていた官職貴族が、反対する属州の軍事費を抑え、自己の政権を維持するために行なったところの、首都の商工業市民への譲歩＝保護の結果にすぎない。西欧とは異なり、ビザンツのギルドは商工業者の利益を守るために作られた自治組織ではなく、国家の利益のために作られ、その統制下におかれたものであった。それゆえ属州の軍事貴族（大封建領主）が政権を奪取するや（一〇八一年コムネノス朝の成立）、ギルドは国家の保護を失い解体する。首都の商工業者を危険視したコムネノス朝はイタリア商人に特権を与え、国家による商工業への保護・統制政策を放棄する。かくして一一世紀末にはギルドは消滅し、市民の政治的な活動も姿を消した。

フランチェスは一一世紀のコンスタンティノーブル市民は主体的な活動をする力を未だもたず、彼らの団体組織も何ら自治的様相をもたない、いわば上から作られ統制された機関と考えた（すでに述べたように彼は市民層が帝国の政策を左右する力をもつのは一四世紀からとする）。封建貴族間の抗争の枠内にその動きは限られていたと考えている点、先のティフチェフと基本的に同じ立場といえよう。これに対して、同じく一一世紀コンスタンティノーブルの商工業ギルドに注目しながらも、対照的な結論に達したのがヴリュオニスである。彼は西欧やイスラムの中世都市にお

いて商工業者がその経済組織ギルドを通じて政治的活動を活発に行なっている点に着目し、ビザンツ世界にも類似の現象がみられるはずだと考える。この視角には第一章で紹介したロムバールやカーエンの研究の影響を認めることができる。まず彼は一一世紀までのギルド制度を概観し、それがコンスタンティノープルの政治に大きな影響を与えるだけの力を備えていたことを、ギルドの組織、富、地理的位置、对国家義務などから結論する。その際彼はかつてロベスやランシマンが帝国ギルド＝皇帝直属の作業場の労働者の団体とみなしていた *gnjataka oviarata* が実は自由な小経営者たちのギルドであることを史料から確かめている。<sup>⑩</sup> 続いて一一世紀コンスタンティノープルの騒乱を順次分析して、帝位の交代に市民の蜂起がしばしば決定的な役割を果たしたことを指摘する。このように市民の政治的活動が一一世紀の政治動向を規定する一要因となりえたのは、文官派と軍事派という貴族間の対立の他に、ギルドの経済力と組織によるものであるとして、ギルドに組織された市民層の力を高く評価するのがヴリユオニスである。ただ彼は一一世紀に活発な動きをみせたコンスタンティノープル市民がコムネノス朝成立後、完全に沈黙することに関しては特に考察を加えてはいない。コムネノス朝の成立は「封建制」の確立と市民・市民闘争の関連はここでは問題とされてはいない。

ギルドに着目したヴリユオニスとはまったく異なった視角から、彼と同じく一一世紀ビザンツ政治における市民の役割を高く評価するのは西独のベック H. G. Beck<sup>⑪</sup> である。彼の主要な関心は国制史にあり、市民の問題も、通例皇帝の専制政治が強調されるビザンツ帝国において、首都の民衆 *Volk* が占めた国制的位位置は如何という形で問われる。ベックは首都の民衆が、皇帝の選出・廃位に関して元老院と並んで国制上の機関として機能したことを述べ、とりわけこの一一世紀における民衆の政治的力の大きさを認めた。彼は帝国の首都、大都市としてのコンスタンティノープルの特殊性を前面に押しだしている。首都の民衆の政治的力の大きさはビザンツ帝国、とりわけコンスタンティノープルに特有の *social mobility* の大きさ、伝統的な *gnjankarata* 理念に負うと。それゆえ彼は、その間に多くの階層を認めつつも、全体としてのコンスタンティノープル民衆を措定している。加えて一一世紀に特有の要因としてこの期の平和と民衆の経済力の向上を挙げている。さらにコムネノス朝成立以降、首都の民衆が突然力を失ない、百年の沈黙の時代に入る点についてもベックは関心を示しており、フランチェスと同じく、属州の軍事貴族コムネノス家の皇帝たちが彼らを政治から遠ざけたこと、イタリア都市への商業特権の付与がコンスタンティノープルの商業に大打撃を与え、

民衆の経済力が低下したことを挙げる。また民衆の後退の一因として、一一世紀の首都の民衆の運動がその上層部の元老院貴族化という形で「勝利」を得たために、彼らの一体性が損われ、指導者を失なった民衆の弱体化をきたしたとする。いずれにせよ「封建制」を直接対象としないベックの国制史的視角からも、コムネノス朝の成立は大きな転換期とされている。とくに「アリストクラティゼーション」の進行と social mobility の減少の問題は、「民衆」と「封建制」の関連の中で興味あるテーマとなろう。

六〇年代の前半には「封建制」論争の影響も受けて、一一世紀における市民の政治的活動への関心が高まった。しかし市民層の動向が帝国の封建化とどう関連するかという問題は、「封建制」論争の夭折もあって、十分に論じられたとはいいがたい。一九六六年の第一三回国際ビザンツ学会は、学界動向を反映して一一世紀の国内問題を共通テーマとしたものの、討論は深められなかった。一連の報告の中でスヴォロノスの農村と都市の社会構造を扱った報告は、都市に関しては、前回の国際学会以降の研究動向をまとめたものとして注目に値する。彼は次のようにまとめた。一一世紀には商工業の発展とともに中産の商工業者が一般の都市大衆とは区別された一つの社会層として確立してくる。彼らほみ

ずからの団体組織をもち、貴族と対立しつつ、帝国の政治に関与し始める。彼らは歓呼により皇帝を承認する集会に参加し、彼らの一部は元老院のメンバーになり、高位の爵位を得る程であった。さらにスヴォロノスは商工業者を帝国の政治の中に次のように位置づけた。この時代の諸皇帝は貴族を抑え、集権的国家体制を強化するためにこの階層を用いようとした。しかし商工業者の成長は政治的にも経済的にも不充分であって、貴族の自立の傾向に対す、国家構造の変換＝集権化の試みの失敗の一因ともなった。

かつて反「封建制」論の代表者の一人であったスヴォロノスのこの報告は、彼が帝国の封建化を認める立場に移ったかのような印象を与える。しかし彼が国家構造の変換等々を論じる時、主として軍制を念頭においてのことと思われる。地方軍中心のテーマ制（中期）から中央軍タグマタの強化をはかる一一世紀諸皇帝の政策とその失敗、再びテーマ体制に似た軍事体制（コムネノス朝期）へというアルワイラー H. G. Arnweiler の説を採っているであろう。さらにスヴォロノスはこのような体制転換の試みの失敗の原因として、封建化よりも何よりもこの時期の人口減に注目していることも興味深い。人口論からこの時期の危機・体制転換をとらえようとする視角は、「封建制」論争の不毛な概念論

争克服の道として注目する。その点も。が、信頼する史料の欠如など、前途は必ずしも明るいとはなげなない。

- ① H. B. Пиряевская, E. 3. Jimnina, M. Я. Cosonov, A. П. Kazan, Topиk и деревня в Византии в IV-XII вв., *Actes du XI<sup>e</sup> congrès international détinées byzantines*, Tom I, Beograd 1963, pp. 1-44.
- 邦訳渡辺金一『ビザンチン帝國の都市と農村——四—十二世紀——』創文社、一九六八年。
- ② カミル・タンはシロ・シロキンの前章注⑩の研究を念頭にその『』の闘争がロンスタン・テノール・トットは二世紀末ある程度の成果を収めたと指摘する。同上、八四頁。
- ③ P. Lemerle, *Actes du XI<sup>e</sup> congrès international*, Tom I, pp. 275-284.
- ④ *Actes du XI<sup>e</sup> congrès international*, Tom I, pp. 285-298. 渡辺金一「一二回國際ビザンチン會議に出席して」『社会経済史学』二八—二九(一九六二年)八—九五頁。とくは八九—九一頁。
- ⑤ P. Tivčev, 'Sur les cités byzantines aux XI<sup>e</sup>-XII<sup>e</sup> siècles', *Byzantinobulgarica*, I (1962), pp. 145-182.
- ⑥ B. Mendl, 'Les corporations byzantines', *BS*, 22 (1961), pp. 301-309. 邦後発表はわたしの『』巻末に書かれたのは戦前である。
- ⑦ M. Я. Cosonov, *Byzantinobulgarica Kuzna Zhurava*, Moskva, 1962. マン語版の新版。米田治泰書評『西洋史学』六一(一九六四年)五九—六一頁。
- ⑧ E. Francès, 'L'état et les métiers à Byzances', *BS*, 23 (1962), pp. 231-249. Idem., 'La disparition des corporations byzantines', *Actes du XI<sup>e</sup> congrès international*, Tom II, 1964, pp. 93-101. Idem., 'Alexis Comnène et le privilèges octroyés à Venise',

*BS*, 29 (1963), pp. 17-23.

- ⑨ S. Vryonis, 'Byzantine ДИМОКРАТИА and the guild in the eleventh century', *DOP*, 17 (1963), pp. 287-314.
  - ⑩ Ibid., pp. 300-301.
  - ⑪ H. G. Beck, 'Konstantinopel. Zur Sozialgeschichte einer frühmittelalterlichen Hauptstadt', *Byzantische Zeitschrift*, 58 (1965), S. 11-45. Idem., 'Senat und Volk von Konstantinopel', *Byz. Akademie der Wissen. Phil.-Hist. Kl. Sitzungsberichte*, 1966, V. 2. の巻末全被じてついで、渡辺金一「ビザンチンとテノール・キーと社会的現象——H・G・ベックの若干の研究に寄せて——」『一橋論叢』七二—六(一九七四年)一—一五頁。
  - ⑫ N. Svoronos, 'Société et organisation intérieure dans l'empire byzantin au XI<sup>e</sup> siècle: les principaux problèmes', *Proceedings of the Thirteenth International Congress of Byzantine Studies, Main Papers*, Oxford, 1966, pp. 371-389.
  - ⑬ H. Glykatzis-Ahrweiler, 'Recherches sur l'administration de l'empire byzantin au IX<sup>e</sup>-XI<sup>e</sup> siècles', *BCH*, 84 (1960), pp. 1-111.
- 〔第三章〕
- 一世紀の国内問題をテーマとして開かれた第一三回國際ビザンチン学会(六六年)の後は一世紀への関心は急速に薄れた。この学会は一足早く、すでに第一二回の学会(六一年)の後、一—二世紀を対象とする「都市・市民」研究はほとんど影をひそめ、研究の中心は一四世紀に移された。かつビザンチン

スがそこに封建領主の都市支配に抗しつつ、政治的主体としての  
 商工業市民層の抬頭を讀みとっていたところのテサロニカの民衆  
 蜂起（*Noten*）運動をどうとらえるかが問題の中心であった。<sup>①</sup>こ  
 のような学界動向は七一年の第一四回国際学会が一四世紀を共通  
 テーマの一つとしたことにも反映している。<sup>②</sup>戦後オストロゴル  
 キーらによって進められてきた「ビザンツ封建制」論の要ともい  
 うべき、転換期一一世紀の問題は、論点がかみ合わないまま放置  
 されたといっても過言ではない。とりわけこの時期の市民層の位  
 置づけの問題は未開拓のテーマとして、豊かな実りを秘めたまま  
 眠っているといえる。

六〇年代末から七〇年代初における注目すべき研究動向として、  
 都市を含めた一一—二世紀ビザンツ経済の動向を、従来とは異な  
 った方法論に基づきつつ再検討しようとする、ビクター H. A. Bi-  
 lion やヘンディ M. F. Hendy の業績を挙げておきたい。彼ら  
 は「封建制」という概念をビザンツに導入することに反対して、  
 オストロゴルスキーらと激しく論争した、ルメルル、スヴォロノ  
 スらと基本的には同じ反「封建制」論の立場に立つように思える。  
 しかし彼らにあってはもはやかつての「封建制」論争の影はない。  
 概念論争を避け、緻密な実証研究に専念しているのである。ビ  
 クターは人口論を中心として一一世紀ビザンツ経済の動向を分析

し、かつそれを地中海経済全体の中に位置づけようとしている。

そこには前述のロムバールから連なる *Annales* 学派の影響を認  
 めることができよう。六七年の小論文でその考え方を提示した彼  
 女は、七二年には *Annales* 誌上において一層詳細な、商業・都  
 市経済を中心とした一一世紀ビザンツ経済の分析を行なった。彼  
 女は一一世紀の顕著な人口減少を指摘し、それがビザンツ経済全  
 般の後退を示すものとした。ヘンディも同じく一一—二世紀の経  
 済動向の再検討を試みた研究者であるが、彼は貨幣研究からこの  
 問題にとり組んだ。六八年に鑄貨・通貨に関する大著を世に送っ  
 た彼は、その成果に基いて七〇年にはビザンツ経済再評価の論文<sup>③</sup>  
 を著わした。彼はコムネノス朝期のビザンツ経済について、イタ  
 リア都市への商業特権の付与が帝国の経済に大きな打撃を与えた  
 という従来の通説に疑問を呈している。彼の主張は出土貨幣の分  
 析に基くゆえにかなりの説得力をもっている。つまりなお不確定  
 の要素を含みつつも、ビクターやヘンディの実証的研究は、六〇  
 年代半にヴリユオニスやベックによって得られ、第一三回の国際  
 学会でまとめられた結論が前提としていた、一一世紀における都  
 市経済の発展とコムネノス朝成立後のその衰退というビザンツ経  
 済史の通説に対して大きな疑問を投げかけたといえよう。

ビザンツ社会発展の普遍性と特殊性の解明のために、西欧中世都市研究から学びつつ、ビザンツ社会における「都市・市民」のあり方、都市と農村の関係、そしてそれらと分ちがたく結びついたところの「ビザンツ封建制」の特殊性、国家のあり方を明らかにすることが今後の大きな課題であると筆者は考えている。「都市・市民」研究史を扱った本稿の結びとして、この課題に具体的にどのようにとり組めばよいのか考えてみたい。

先に筆者は一一世紀のビザンツ政治史を扱った論文<sup>②</sup>において、有力貴族と皇帝権の問題をとりあげ、一〇八一年のコムネノス朝の成立を封建貴族間の権力闘争の終結と連合支配体制の樹立の画期ととらえた。しかしここでは封建貴族とその支配下の農民との関係、商工業市民層の動向が、どれ程この過程に反映しているのかについてはほとんどふれることができなかった。これらの点に關しては史料の制約が大きく、とりわけ前者についてその解明は至難である。しかしこれらの点は封建貴族間の権力闘争から連合支配への転換を促進した要因の一つと想定できる。コムネノス朝Ⅱ封建国家体制の確立の問題は、貴族間の権力闘争、外圧による帝国の危機のみからは考えられず、内部にかかえていた問題、とりわけ明確な姿をとった「市民闘争」との関係からもとらえられねばならない。しかも市民闘争はコムネノス朝成立の単なる一要

因にとどまるものではない。コムネノス朝の支配体制を規定する要因として、それが支配構造に残したろう刻印を明らかにすることも重要である。つまりコムネノス朝の成立に対して市民闘争はどのように作用したのか、一一世紀に繰り返された市民の政治的活動、蜂起の後に成立したコムネノス朝は市民層とどのような関係にたつてその支配体制を構築したのか、問題はこのように立てられるべきである。

一一世紀の一連の「市民闘争」の形態、組織、参加者、イデオロギー、要求、結果を解明し、闘争の歴史的な性格を全体として明らかにすることは容易ではない。しかしコムネノス朝の成立、その支配構造の特質を「都市・市民」の側面から明らかにしてゆくには、この作業は不可欠である。とりわけ第一に、主体的に闘争を担った社会層の解明が重要である。この点に關しては六〇年代の諸研究においても見解は様々であった。元老院を中心とする文官貴族の指導（それゆえ真の市民層の運動ではない）とするフランチェス、ギルドに組織された商工業市民とするウリュオニス（スヴォロノスもこの見解に近い）、伝統的国制理念に基づく首都民衆全体とするベックなど、見解が分かれたままである。すでにみたように一一世紀の民衆の運動の性格は一面的にはとらえきれない複雑さをもっていた。その歴史的な性格の解明の第一歩とし

て社会層の問題をとりあげねばならない。その際このような社会層の性格、成熟度を明確にするために、近年行なわれているこの期の経済動向の再検討の成果もまた積極的に撰取されるべきである。第二に闘争の結果をどう評価するかという問題が大切である。すでに述べたようにコムネノス朝の成立以降は市民層の政治的活動は完全に絶える。このことは一般にイタリア商人への商業特権付与に示されるようなコムネノス朝の政策から説明されてきた。

それは市民層の未熟さ、「市民闘争」の「敗北」という結論を引き出すことにもなる。しかしコムネノス朝諸皇帝が国库の利益をそこなうまで、イタリア都市に特権を与えたことは注目すべきである。特権付与は南イタリアのノルマン人との対抗上、イタリア都市から艦隊援助をおおぐために必要な措置であった。さらにアレクシオス一世を帝位につけた属州の封建領主層の利害の反映でもあった。しかしそれにとどまらず、市民層の勢力を削ぐという意味ももったのではないだろうか。ラテン人（とくにイタリア商人）と結ばねばならなかったところのコムネノス朝支配構造の特質は、一一世紀「市民闘争」の残した大きな遺産ではなかった。コムネノス朝末期には再び市民の激しい蜂起が生じる。コムネノス朝を打倒し、ついには帝国の解体を引きおこす一要因となったこの一二世紀末の「市民闘争」は、反ラテン人という性格を

前面に押しだして、一一世紀のもの以上の深さと広がりをもっていった（農民・漁民との連合すら認めうる）が、それもコムネノス朝の支配構造の特質を反映していたのである。それゆえコムネノス朝の成立も決して一一世紀の一連の運動の全面的な否定であつたわけではない。また同時に筆者は次の点にも注目したいと思う。それは一一世紀後半からコムネノス朝成立期にかけて生じた市民の上層部の元老院貴族化の現象である。ベックはこれを Volk の一体性の喪失、指導者の脱落として Volk の政治的活動の衰退の原因としていた。しかしここにおいても一一世紀の「市民闘争」がコムネノス朝の支配体制の中にどういう形で受け継がれてゆくのかという視点を必要としているように思われる。

以上、学説史を整理し、「都市・市民」の問題を投射して「ビザンツ封建制」像を一層豊かに描くという課題への筆者なりの出発点を明らかにしたつもりである。これらの問題点の裏証的な解明については稿を新たにする予定である。

① 代表的なものとして M. R. Cosonov, 'K rompocy o xupaprye BHCpYCHH Hupopos n 1342-1349', *IB*, 28 (1968), ctp. 15-37.

② 学会報告「Rapports, XIVe congrès international des études byzantines, Bucarest, 1971.

③ H. Antoniadès-Bibicou, 'Problèmes d'histoire économique de Byzance au XIe siècle', *BS*, 28 (1967), pp. 255-261.

- ④ Idem., 'Demographie, salaire et prix à Byzance au XI<sup>e</sup> siècle', *Annales*, 27 (1972), pp. 215-246. ヲムネーは人口問題の他に官職保有者の給料、小妻等の価格変動にも深く関心を寄せている。
- ⑤ M. F. Hendy, *Coinage and Money in the Byzantine Empire 1081-1261*, Washington 1968.

- ⑥ Idem., 'Byzantium, 1081-1204 : An Economic Reappraisal', *Transactions Royal Historical Society*, 20 (1970), pp. 31-52.
- ⑦ 拙稿「コムネノス朝の成立——二世紀ビザンツ帝国の政治体制——」『史林』五七—二（一九七四年）七〇—一〇一頁。

大阪市立大学文学部助手・